

經濟論叢

第十八卷 第二號

人間疎外の論理(上).....	平井俊彦	1
政府部門の理論的考察(-).....	池上惇	14
經濟調査の資料的限界.....	斎藤一郎	26
「生産価格」の消滅過程.....	芦田文夫	38
世界恐慌論における二類型(上).....	重田澄男	55

昭和三十六年八月

京都大學經濟學會

世界恐慌論における二類型(上)

重田澄男

目次

- 一、はじめに
— 戦後循環の基本的指標と世界恐慌 —
 - 二、世界恐慌についての外国の諸見解
a 波及理論の原型 — ヴァルガー —
b 波及理論の発展 — エルスナー —
c 同時成熟論(Ⅰ) — メンデルソン — (以上、本号)
 - 三、世界恐慌についてのわが国の諸見解
a 日本版波及理論 — 佐藤定幸 —
b 同時成熟論(Ⅱ) — 井汲卓一 —
 - 四、おわりに
— 問題点の所在と今後の課題 —
- 一、はじめに
— 戦後循環の基本的指標と世界恐慌 —

って、はなやかな論争が展開され、そこでくりひろげられた見解は多種多様であったが、それらは大きく分けてつぎの三つの見解にまとめることができるようである¹⁾。

第一は、一九五七—五八年恐慌を「循環性恐慌」であるとする見解であって、わが国では『世界経済年報』や小椋広勝、名和猷三、佐藤定幸などの諸氏、ならびに、ヴァルガー、シュミット、ドップ、スウィージー、アンリ・クロードなど海外のマルクス経済学者のほとんどによって、主張されているものである²⁾。この立場のなかにも様々な見解があるが、ともかく、そのほとんどが、一九四六年ないし一九四九年を始点として戦後循環は開始され、一九五三—五四年の中間恐慌をへて、一九五七—五八年恐慌という循環性恐慌でもってその周期は終了した、と考えている。このような循環と周期の考え方や、あるいは、それが循環性恐慌であることの理由として採りあげられた指標などの点からみると、この見解は、第二次大戦後の国家独占資本主義

戦後循環の性格、とくに一九五七—五八年恐慌の規定をめぐ

世界恐慌論における二類型(上)

における恐慌の発現形態の変容を強調しているとはいふものの、恐慌ならびに経済循環の基礎理論として古典的形態にちかいかいもの考えているようである。

第二は、一九五七—五八年恐慌は「中間恐慌」であったとする見解であつて、井汲卓一、今井義夫氏らを中心として、主として『季刊日本経済分析』において、多岐にわたつて展開されている。この見解は、恐慌の発現形態ならびに経済循環の展開形態について、第二次大戦後においても、基本的には古典的形態が貫徹するものであると考えている。

第三は、独占の強化と国家独占資本主義の発展による経済循環と恐慌の形態変化を強調する見解であつて、これも幾人かの入たちによつて様々な形で展開されているが、その代表的なものは、第二次大戦後においては、ひんばんな生産後退という形で恐慌の発現形態が変化した、とされている。したがつて、この見解の場合には、形態の変形によつて、循環性恐慌と一周期内における中間恐慌とを区別する意味はなくなつた、ということになる。このような考え方は、豊崎稔、瀬尾美巳子などの諸氏の諸見解にみられるが、メンデリソンの見解もほゞこれと似た点もあり、また、最近のシュミットやヴァルガ、ダーリンなどの論文においてもそれに近い見解が述べられたりしている。⁴⁾ さしあたり、便宜的に、第一の見解を「循環性恐慌説」、第二を「中間恐慌説」、第三を「循環変形説」として、それぞれ

の見解における循環性恐慌の基本的指標をみてみると、循環性恐慌説では「固定資本投資の下落」⁵⁾に示ばられているのたいていして、中間恐慌説においては、「価値革命」と「恐慌の世界的同時性」⁶⁾との二つの指標が問題にされている。(なお、循環変形説についてみると、それはまだ十分に理論的体系化がおこなわれておらず、たとえば、これまでの戦後循環にあらわれた形態上の諸特徴を、計量的に検出するか、あるいは、国家の諸政策と独占の力が恐慌を短期化せしめたという指摘にとどまっている。すなわち、ここでは、国家独占資本主義の再生産論と蓄積論との展開のうえにたつた循環の変形のメカニズムがあきらかでないため、その基本的指標の検討は困難であるので、当面これを除いて論をすすめたい。)

以上のような循環性恐慌についての基本的諸指標のうち、「固定資本投資の下落」と「価値革命」との比較検討にかんしては別の機会にゆずるとして、ここでは、「恐慌の世界的同時性」についてみてゆきたいとおもう。そこで、問題は、つぎの点に示ばられる。まず、恐慌の世界的同時性は、はたして循環性恐慌の基本的指標たりうるか否か、そしてその根拠は？ といで、もしそれが基本的指標たりうるならば、中間恐慌説におけるもう一つの指標たる「価値革命」とどのような関連性をもつものであるか、あるいは、循環性恐慌説においてそれが指標の一つとしてとりあげられないのは、どのような理論的

根拠にもとずいているのか。

これらの諸点をあきらかにするための第一歩として、本稿では、古典的形態における恐慌の世界的同時性に論点をしぼり、海外ならびにわが国の代表的な諸見解が、それをどのような理論的根拠をもって把握しているか、という点の検討をおこないたいと考える。というのは、現在のところまだ古典的形態における指標の確定とその根拠すらも十分あきらかにならないうち、そこに現実的分析での多くの混乱の根元の一つがあるようにおもわれるからである。それを明確にすることは、世界恐慌論の理論化のための出発点であり、それらの確定のうえにたつて、はじめて、第二次大戦後の条件のもとでの恐慌と経済循環の発現形態における変化とその限度をあきらかにすることも可能になるものとおもわれる。

- (1) 小林義雄「恐慌分析のための一視角」(『経済評論』一九五九年三月号)においても、ほぼこれと同じような分類をしてある。

(2) これらの諸見解についての主要な国際的語文獻は、名和献三・玉井龍象編『現代資本主義と恐慌—戦後景気循環の特質と問題点—』(一九五七年一〇月)、同編『戦後景気循環論—統・現代資本主義と恐慌—』(一九五九年一月)、名和献三・佐藤丹編『現代資本主義の構造と循環』一九六〇年一月、以上、合同出版社刊)に収録されている。なお、わが国の諸氏については、世界経済研究所編『世界経済年

報』(日本評論新社)の各号などで展開されているが、名和他著「世界経済の循環過程と現局面の分析」(社会主義政治経済研究所編「戦機における日本経済」一九五九年二月、中央公論社)において、その詳細な分析がみられる。

- (3) 経済分析研究会編『日本経済分析』(大月書店)の各号を参照のこと。なお、註(2)でふれた「戦機における日本経済」には、「循環性恐慌」説的分析とならんで、井波卓一氏による「景気循環の現局面と日本経済」が所収されており、一九五七—五八年恐慌を「中間恐慌」と規定する立場からの分析がおこなわれている。また、この見解の理論的基礎を追求せんとした論文として、力石定一氏の諸論文——「戦後循環の始点と終点」(『経済評論』一九五九年三月号)、「現代経済と景気循環の特殊性」(『経済評論』一九六〇年六月号)、「景気循環の現局面と世界経済」(『世界』一九六一年一月号)——もみのがさるべきではない。
- (4) 豊崎稔「アメリカ資本主義の基本動向—今次不況過程を通じて見た一考察」(『経済評論』臨時増刊、一九五八年八月)、同「戦後産業循環と恐慌」(『現代資本主義講座』第一巻、一九五八年一月、東洋経済新報社)

瀬尾美巳子「戦後アメリカの経済成長と景気循環の若干の特質について」(『関西大学商学論集』第二巻、第五号、一九五七年十二月)、同「米国工業生産発展の歴史的趨勢と循環に関する統計的考察」(同上、第三巻、第三号、一

九五八年八月)、同「米國工業における産業循環の変型とその構造—成長率分析の試み—」(同上、第四巻、第一号、一九五九年四月)、同「現代の産業循環と独占構造—計量的・理論的分析」(『経済評論』一九五九年十一月号)。

メンデルソン「戦後循環の特殊性についての問題によせて」(『現代資本主義の構造と循環』所収)、「現代資本主義の経済恐慌」(『世界政治資料』第七十八号、一九五九年九月)、「L. A. Mendelson, Wirtschaftskrisen und Wirtschaftszyklen nach dem zweiten Weltkrieg, *Konjunktur-Krise-Krieg*, 1959. など他。

シュムハット「恐慌理論の新しい諸問題」(『資本主義の循環的發展について』)、「戦後景気循環論」所収)、「独占資本主義における恐慌と循環の若干の問題について」(『経済評論』一九六〇年六月号)、「現代における恐慌と循環の諸問題」(『現代資本主義の構造と循環』所収)その他。とくに J. L. Schmitt, *Zyklische, nichtzyklische-temporäre und chronische Krisensehnungen in der Wirtschaft des gegenwärtigen Kapitalismus, Konjunktur und Krise*, 1960, Heft 2/3.

ヴァルガ、ダーリンについては、『経済評論』一九六一年七月号に訳載されている論文と発言要旨を参照のこと。

(5) 「私は、一九五七年の九月以後アメリカ工業生産が下り

はじめたとき、これはアメリカで循環性の過剰生産恐慌が始まったことを意味するものであり、世界的な過剰生産恐慌を前ぶれるものだという見解をのべた。その理由はこの工業生産の低下は固定資本投資の減少によるもので、一九五三—五四年の景気後退とは性質を異にしているということにあった。(小椋広勝「世界景気の回復とその性格」—日本経済調査会編『日本経済四季報』第二十四号、一九五八年第四・四半期、四頁。)

(6) 「恐慌のすべての要因は中間恐慌のばあいも、循環性恐慌のばあいと同じように生じうる。ただ、いわゆる『価値革命』を生ぜしめるような基本的要因がそこに成熟しているか否かだけが両者を区別する。すべての指標はその判断のためにのみ役立てねばならない」(井汲卓一「循環と周期」—『貿易研究』第六号、一九六〇年三月、四六頁。)

(7) 「このような景気循環の過程は生産関係の最も上部構造的な関連にいたるまでの、生産のすべての契機を総合したところの運動である。したがって、それは世界経済的な関連の中ではじめてその完成された形態をなす。なぜなら、世界経済的な関連の中からはじめて『生産は全体性として指定せられ、またその契機のいずれもが、同様に指定されている。だが同時にそこではすべての矛盾が過程に登場する』(マルクス『経済学批判要綱』)からである。したがってまた循環の決定的局面である恐慌もまた世界経済恐慌としてその全体的な姿容をあらわす。」(井汲卓一、同上、

(8) この点については、昨年の経済理論学会第三回大会におけるわたくしの主要討論のなかで、一応の見解をしめしておいたつもりである。

二、世界恐慌についての外国の諸見解

a 波及理論の原形—ヴァルガ—

ヴァルガは、『世界経済恐慌史(一八四八—一九三五年)』における理論的部分(第一部)のなかで、『世界経済恐慌』を、われわれは、決定的な資本主義諸国を同時に捉えるところの、過剰生産恐慌と解す¹⁾と、世界恐慌についての規定をあたえている。そして、このような世界恐慌の発生と展開について、つぎのようにのべている。

「資本主義の歴史を研究するならば、周期的な過剰生産恐慌の最初の徴候がすでに十八世紀末および十九世紀初葉にあらわれているのがわかるであろう。しかしながら、当時においては、資本主義の生産様式は本質的にはイギリスないしは西欧の限界に限られていた。それゆえ、恐慌は世界的性質をおびなかつた。ただ十九世紀以降になつてはじめて『世界経済恐慌』について語る事ができるのである。」²⁾「十九世紀の中葉にいたつて、資本主義的發展は、イギリスについて、その他一連の諸国をも扱えた。この意味において、一八五七年の恐慌は、最初の国際

的恐慌と呼ぶことができる。」³⁾

このヴァルガの叙述からみるかぎり、世界恐慌の発生を、資本主義の生産様式の確立した国の多数化・国際化の基盤のうえに把握しようとしているかのようである。ところが、かれは、「最初の世界恐慌」たる一八五七年恐慌を発生せしめた要因として、一九世紀第三・四半期は一系列の戦争で満たされたこと、それらの戦争は——南北戦争以外は——いずれも工業の増大を促進せしめ、多数の諸国に資本主義が急速に発展した時期ならしめたこと、そして、「これを促進せしめた要因」として「商業の自由、さらに強化された鉄道建設、老大な軍事的注文」を羅列的に指摘するにとどまっておらず、最後に、「一八五七年の恐慌は、資本主義の歴史上はじめて、イギリスにおいては、ではなく、アメリカ合衆国において開始されたのである」という点に、その特徴をみいだしている。したがって、そこには、イギリス以外の諸国における資本主義の生産様式の發展が世界恐慌の発生をひきおこした基盤である、という点の一般的指摘しかなく、そのような資本主義国の多数化という根拠にもとずいて、「決定的な資本主義諸国を同時に捉えるところの過剰生産恐慌」が、いかにして、どのようなメカニズムによって、生みだされてくるのであるか、という点の理論的検討をおこなおうとしていない。そして、恐慌の歴史の具体的分析(第二部)においても——それは、一八二五年恐慌からではなく、一八五

七年恐慌からはじめているが——、世界恐慌あるいは世界循環の展開という総体の運動の検討なしに、主要資本主義国における恐慌の展開を個別的に検討する、という方法をとっている。

だが、このような分析方法をとるについては、ヴァルガにはヴァルガなりの理論的根拠があつたようである。

かれは、循環性恐慌の一国内部における要因と世界的展開との関連性について、つぎのようにいつている。「最主要資本主義諸国における恐慌の勃発のモメントとして決定的意義を有するものは、国内市場の増大である。なぜならば、国内市場こそは全生産物の圧倒的部分を呑込むものであるから。あれこれの国々において真の恐慌が発生するための国内的諸前提が多少とも成熟している場合には、他の国々における恐慌の発生は、この国々に恐慌を勃発させるにいたる刺激を与えることもありうるし、またその発生を促進させることも可能である(この場合、外国貿易以外に、大なる役割をはたすものは信用の国際的絡みあいである)。当該国において、真の恐慌の発生のための内的諸前提が存在しない様な場合には、世界経済恐慌はただ経済状態の悪化に・個々の生産部門の部分的恐慌に・導くだけであつて、真の恐慌の発生へは導かないのである。」

このヴァルガの見解においては、まず、「あれこれの国々において真の恐慌が発生するための国内的諸条件が多少とも成熟している場合」と、「真の恐慌の内的諸前提が存在しない様な

場合」というかたちで、個々の国内における恐慌要因の成熟はばらばらの孤立的なものとして把握され、そのうえで、いくつかの国々に恐慌要因が成熟している場合にはじめて一国内での恐慌の発生が他の国々の恐慌の勃発に「刺激を与え」「促進させる」ものとして、とらえられている。そして、そのような一国内の恐慌が他国に「刺激」「促進」的作用をおよぼすための条件として、「外国貿易」と「信用の国際的絡みあい」という点にのみ注目しようとしている。このようなヴァルガの見解は、世界恐慌論の一類型たる波及理論の端初的原型であつて、エルスナーへとひきつがれてゆく。

(1) ヴァルガ『世界経済恐慌史(一八四八—一九三五年)』

第一巻、一九三七年、永住道雄訳、巖波書店刊、六頁。

(2) 五頁。(3) 三三頁。(4) 三四頁。

(5) 三九頁。

(6) このようなヴァルガの見解にたいして、すでに、井汲卓一氏によるつぎのような批判がおこなわれている。「『ヴァルガ』においては、世界循環なるものは各国別に成熟している各国それぞれ循環のよせあつめにすぎず、それゆえにある国々の恐慌は他の国々に恐慌を勃発させる刺激となつたり、促進させたりすることはあるにしても、ただそれだけのことである。……ヴァルガによれば、たまたま各国の局面が同程度にまで成熟していたから、一国内の恐慌が他国の恐慌を刺激したり促進したりして世界恐慌になるに

すぎない。だが問題は、何故に各国それぞれに発展の不均等がありながらほぼ同一の時点において恐慌の条件が成熟するのかわり点にある。」(井汲卓一「一五七年―一五八年恐慌」『貿易研究』第三号、一九五九年七月、五六頁。)

(7) ヴァルガは、その最新の論文「マルクス主義恐慌論と景気研究」(『経済評論』一九六一年七月号、長谷川要訳)において、「マルクス主義者による景気研究(再生産の循環的な変動の研究)の基本的課題は、つぎの点にある。その期に資本主義経済は、全体として循環のどの局面にあるかをまず決定する。つぎに、一部の国が全体とちがった循環の他の局面になせおかれているかについて説明を加えることである」(一〇五―一〇六頁)として、「現在(一九六一年三月)世界資本主義経済は全体として高揚局面から恐慌局面へと移行している」という規定にもとずき、「ごく近い将来に、世界的な恐慌がおこる。このあとの循環は周期性をもつようになり、しかも、循環期間が次第に短縮されていく」(一一五―一一六頁)との予測をおこなっている。だが、その予測の背景としての戦後における循環性恐慌とその世界的展開については、「戦後、一九五七年までの間、世界的な過剰生産恐慌はなかった。また、一九五八年恐慌も資本主義世界のすべての国には波及しなかった」(一一三頁)としながらも、「戦後のアメリカおよびカナダの再生産過程は、他の国とはまったく違った情景を呈している。これらの国については、われわれはすでに一九

四八年、一九五三年、一九五八年のそれぞれの年に過剰生産恐慌をみている。さらに、一九六〇年から新しい恐慌がはじまった」としている。そして、そのような「戦後のアメリカの諸恐慌のうち、いくつかは、真正の過剰生産恐慌ではない。部分的な恐慌と考えられる。しかしながら、このような決定をくだすには、まだ、いろいろの問題が未解決である」(同頁)という。

もちろん、大戦による単一の世界経済体制の分裂とそれにもとづく世界循環の分裂が、戦後の状況のなかでどのような形で回復されつつあるかについては、具体的分析を必要とするであろう。しかし、このヴァルガ論文における世界恐慌と各国恐慌との関連性の把握の仕方には、本節で指摘した各国における孤立的な恐慌要因のたんなる合成物として世界恐慌をとらえようとする欠陥がまだ尾をひいている。

b 波及理論の展開―エルスナー―

ヴァルガにみられる波及に基軸をおいた世界恐慌論は、エルスナーにおいて、より整備されたかたちで展開されている。

エルスナーは、世界市場と恐慌との関係を、「恐慌に及ぼす外国市場の影響」という視点からのみみてゆこうとする。かれは、まず「世界貨幣としての貨幣の役割」をとりあげて、それが「いっそう進んだ恐慌要因をつくりだす」と指摘し、ついで、「世界市場における個々の国民経済のからみあいには恐慌を通じ

て促進されるが、それとともにまた、恐慌を促進する」として、「新市場の開拓と経済恐慌との密接な関連」を指摘する。しかし、それはたんに外国貿易の発展がますます広範囲の世界市場を創出することによって恐慌の範囲を拡大し、また、これらの「新市場それ自身が新しい恐慌の出発点ともなる」ということの一般的指摘にとどまっている。そして、世界市場と世界恐慌との関連については、たんに交通手段の発展という契機をとりあげて、「交通手段の発展は、とりわけ単一の世界市場の形成を促進し、それによって恐慌の世界経済恐慌への転化を促進したのである」というみじかい叙述があるだけである。

このような理論的基礎のうえにたつて、かれは、最初の世界恐慌たる一八五七年恐慌について、つぎのように述べている。「一八五七年の恐慌は、とりわけ、それがどの以前の恐慌にもまさつてすぐれて国際的な性格をおびていたことによつて、その先行の諸恐慌と異なっている。資本主義的生産方法はヨーロッパと北アメリカにおいて市民権を獲得し、あらゆる発達した商業国民は循環的發展に支配されるにいたつた。恐慌がアメリカに勃発し、イギリスに燃えうつり、ハンブルグを経てドイツとオーストリアに波及し、フランス、スカンディナヴィア、ロシア、イタリヤ、スイス、ベルギー、オランダ、要するに全資本主義世界に拡大した。それは一つの世界経済恐慌であつた。」

このように、ユルスマーは、一八五七年恐慌の世界恐慌としての劃期的意義をみとめてはいる。だが、問題は、循環性恐慌が世界恐慌として発現するにいたつた根拠と条件、すなわち、その経済的基礎はどこにあるのか、ということである。かれは、それについては、一八四七年恐慌以後における新市場の開拓、産業の高揚、外国貿易の発展、信用と投機の膨張などについて語るだけで、それらの内的連関性と意義については分析をおこなっていない。

しかし、はたして、このような外国市場の拡大という点に、世界恐慌発生の根拠があるのだろうか。たしかに、「世界貨幣としての貨幣」の機能が確定し、「外国貿易」と「国際信用」の発展があるならば、そのかぎりにおいて「単一の世界市場」の形成と拡大は促進され、個々の国の経済状態の変化はただちに他の国々へも波及してゆくようになる。そして、「交通手段の発展」とそれにもとづく「外国市場の拡大」は、そのばあいの波及範囲を拡大し、波及速度をはやめるものとして作用するであろう。しかし、世界恐慌なるものがただそれだけのことしか意味しないものであるならば、イギリス以外のいくつかの国において「資本主義的生産方法」が、「……市民権を獲得」するまで待つ必要はない。イギリスに資本主義的生産様式が確立し、全般的過剰生産恐慌が爆発するようになるや否や、イギリスと直接・間接に貿易しあるいは国際的信用関係をとり結んで

いるかぎりにおいて、恐慌は国際的に波及せざるをえない。そして、イギリス恐慌が周期性をもつかぎり、その外国市場への波及もまた周期性をもつようになる。このように、世界恐慌の展開の基軸を国際的「波及」という点においてみるならば、一八五七年恐慌の「史上最初の世界恐慌」としての意義は、それ以前の恐慌の国際的性格と質的な相違をもたなくなり、たんに量的な差異としてしかとらえることができなくなってしまう。

世界恐慌が世界恐慌たりえた経済的基礎は、たんなる世界市場の確立・拡大と貿易・信用などの発展による諸国間の緊密さの強化のみにあるのではない。もちろんそれは世界恐慌発生のためには不可欠な「必要条件」であり前提的基盤であるが、それだけで「十分条件」を構成するものではない。世界恐慌の必然性、すなわち、その発現のための「必要かつ十分なる条件」を把握するためには、いくつかの諸国における資本主義的生産様式の確立の意義、いかえると、それが世界市場の内容にあたる質的変化を考察することが必要である。そして、そこに、恐慌の世界的同時性・世界循環の形成という循環運動のあらたな展開形態を分析し、資本一般の恐慌の理論から世界恐慌の理論へと上向・具体化してゆくなかではじめて提起される問題をあきらかにするためのカギが秘められているのである。

(1) Fred Oelbner, Die Wirtschaftskrisen, Erster Band; Die Krisen im vormonopolistischen Kapitalismus,

世界恐慌論における二類型(上)

Dietz Verlag, Berlin, 1955, S. 90. エルスナー『経済恐慌—その理論と歴史—』千葉秀雄訳、大月書店、一〇九頁。
(2) Ebdenda, S. 91-94. 一〇一—一〇三頁。
(3) Ebdenda, S. 229. 二七四頁。
(4) エルスナーは、一八五七年以前の諸恐慌についても、つぎのように言っている。

一八二五年恐慌——「一八二五年の恐慌はイギリスだけにかぎられず、当時の全資本主義世界におよんだ。北ドイツとオランダでは同じように多数の商社が破産した、阿姆斯特ダムでは一八二五年一月には割引率が一〇%に上昇した。綿花投機にはげしくまきこまれていたアメリカ合衆国も大きな経済的諸困難を経験した。」(S. 208. 二五〇頁。)

一八三七年恐慌——「この恐慌の国際的影響は……このまへの恐慌のそれほど広範ではなかった。それは主としてイギリスとアメリカとにかぎられていた……。」(S. 213. 二五五頁。)

一八四七年恐慌——「イギリスは一八四八年の恐慌の震源地であったが、この恐慌は国際的性格をおびていた。ヨーロッパのあらゆる大商業地は恐慌にひきいられた。パリと阿姆斯特ダム、ブレーメンとハンブルグ、フランクフルトとペテルブルグ、オフェンバッハとカールスルーエ、マンハイムとライン河下流地方とは、広般な破産の舞台となつた。」(S. 228. 二七三頁。)

第八十八卷 一三五 第二号 六三三

(5) エルスナーが、『經濟恐慌—その理論と歴史—』において展開した恐慌史分析での問題意識の一つは、産業資本主義確立以前の恐慌と以後の恐慌との性格の相違をあきらかにすることによって、循環性の全般的過剰生産恐慌の資本主義的性格を暴露し、ブルジョアの恐慌論の弁護論的説明の誤まりをさしめすことであつたようである。そのため、かれは、産業資本確立以前の恐慌についてかなり詳細な分析をおこなっているし、また、そのかぎりにおいては、ヴァルガの恐慌史分析の不十分さと欠陥とを補足・發展せしめ、いくつかのユニークな分析と見解とをしめしている。だが、その点に重点をおきすぎたため、一八五七年における世界恐慌確立の根拠と意義については、きわめて不十分な形でしか把握できなかったのではないかとおもわれる。

c 同時成熟論(Ⅰ)—メンデルソン—

ヴァルガやエルスナーとちがって、メンデルソンは、循環性恐慌の世界的展開を、たんなる一国の恐慌の他の国々への波及という形ではなく、個々の国々の内部における恐慌要因の成熟が世界的規模において同時に展開するものとして、いいかえると、世界經濟循環の一局面として、把握しようとしている。かれは、『恐慌の理論と歴史』の理論的部分(第一部)のなかに、わざわざ「世界恐慌が発生し世界經濟循環が形成される經濟的諸条件と歴史過程」なる章をもうけ、世界恐慌についての詳細

な理論的検討をおこなっている。

メンデルソンは、そこでまず、「資本主義が一定の發展段階になつると、恐慌は世界的性格をもつようになり、再生産過程の世界的循環性ができあがる。世界經濟循環が発生するための諸条件の形成は徐々におこなわれて、つぎの諸点にあらわれる」として、三点をあげている。

「一、資本主義の諸關係がつきつぎに新しい国々で發展するにつれて、恐慌法則の作用がそれらの国々にしだいにひろまっていく。

二、商業や信用そのほかの國際的な經濟關係の發展、國際的分業の發達、その他すべての諸過程は、世界市場が發展し、資本主義的世界經濟制度がしだいに形成されることをあらわして、それぞれの國の再生産過程の變動における相互連関の拡大と強化を助長する。これをもとにして、それぞれがった国々における恐慌發生の時期の統一が確立される。いうまでもなく、この統一は相對的なものである。……

三、恐慌が時期的に一致することがもたなつて、ことなつた国々における循環局面の交替の全過程の國際的な統一ができあがる。……ことなつた国々における循環局面の交替の相互連関は非常に緊密になるので、個々の國における循環は単一の世界經濟循環の構成部分に転化する。個々の國における循環の經過の相違は、世界循環の展開の不均等性の形態になる。」

このようなかたちで世界経済循環の発生のための諸条件と内容について整理したのも、メンデルソンは、「この問題の主要理論的困難」として、つぎの二点をあげている。第一は、資本主義的過剰生産恐慌が不可避となる発展段階に迄まだたっしていない国々への「恐慌法則の波及」について、「どうしてそういうことになるのか」「そのような国々における恐慌の発現の主要な特殊性はどういうことか？」という点。第二は、「國際的規模での社会的資本の再生産過程の統一」ができあがり世界経済恐慌を発生および完了の契機とする単一の世界経済循環がつかりだされるにあたって、その土台となる具体的メカニズム、経済諸過程はどういうものか、という問題¹⁾である。

このように、かれは、恐慌の「波及」の問題と、「國際的規模での社会的資本の再生産過程の統一」すなわち「単一の世界経済循環」の問題とを、あい関連させつつも、一応別個のものとして區別してとりあつかっている。ここに、メンデルソンの世界恐慌論の重要なポイントがある。

恐慌の波及

メンデルソンは、たとえある国々がまだ過剰生産恐慌を自立的に発生するにいたるだけの資本主義的發展段階にまで到達していない場合でも、「それらの国々の内部においてもブルジョア的諸関係が一定の段階に發展して……、とくにそれらの国

の外国貿易がある程度發展して²⁾、さえすれば、先進国の全般的過剰生産恐慌はそれらの国々へ波及してゆくものである、と指摘する。そうすると、「この段階における恐慌³⁾」も……たんに國際的意義をもっていただけでなく、國際的な作用範囲をもっていた⁴⁾のは当然である。すなわち、世界最初の資本主義国たるイギリスの機械制工業は、たんに世界市場と結びついていただけでなく、「世界の工場」として世界市場のなかで主導的地位をしめていたため、イギリスに発生した過剰生産恐慌は、「導管」としての「外国貿易」が存在しさえすれば、ただちにそれらの国々へと過剰商品を充満せしめる。そして、それらの国々の内部に一定のブルジョア的諸関係の發展——かならずしも資本主義的機械制工業の發展にかぎらない——が存在すれば、それらの国々の経済状態に變化をひきおこし、恐慌現象を「波及」せしめることは不可避となる。

だがしかし、このような形で恐慌の國際的展開は、本来的な世界恐慌を意味するものではない。それは、先進国の過剰生産の「結果として」「反映としてのみ」展開された恐慌であり、本質的には先進国の恐慌の「あらわれの一形態」であるにすぎない。メンデルソンは、一八二五年恐慌について、つぎのように言っている。「たしかに、一八二五年の恐慌でさえ、それが一連の国々の経済に反映したかぎり、國際的な作用範囲をもっていた。だが、本質的には、それはやはりイギリス恐慌であっ

た。というのは、他の国々における恐慌現象の決定的基礎となつたのはイギリスにおける過剰生産であつたからである。」

このような状況は、歴史的には、一八世紀末から、九世紀の三〇年代ころまで続いた。しかし、「一八三七年にも、一八二五年とおなじように、イギリスは、過剰生産が実際に全般的な性格をおびたただ一つの国であつた。」イギリス以外の国においても資本主義の発展はみられたが、しかし、それはまだ部分的過剰生産恐慌をおこすにたる程度のものでしかなかった。ところが、一八四七年においては、情勢はかわつてきた。このころには、すでにアメリカとフランスでは、資本主義的機械制工業は、全般的過剰生産恐慌を不可避ならしめるにたるだけの発展段階にまで到達していた。「しかし、一八四七年恐慌とそれ以前の恐慌とのこの重要な相違は特殊な具体的、歴史的諸条件によつて、ややあまいまいになり、「隠蔽」され「弱められ」た形でしか経過しえなかつた。

かくて、世界恐慌の視角からみると、いわば「過渡的恐慌」ともいふべき一八三七年恐慌と一八四七年恐慌とを経て、一八五七年に、「最初の世界恐慌」が爆発するにいたる。

世界経済循環の一局面としての世界恐慌

一八五七年恐慌について、メンデルソンは、つぎのように述べている。「一八五七年の恐慌は真に世界的規模での最初の恐

慌であつた。「独立した」全般的過剰生産恐慌のための基礎は、そのころまでに、イギリスだけでなく、アメリカ、フランス、ドイツをもふくめた、すべての発展した資本主義諸国において成熟していた。他の一連の国々でも工業の発展が非常にすすんで、一八五七年の恐慌現象は、——これらの国は独立した全般的過剰生産恐慌がおこるほど完全にはまだ成熟していなかつたにせよ、——これらの国においてもはや世界恐慌のたんなる反映ではなく、内的基礎をもつていた。」

このように、メンデルソンは、「真の意味での世界恐慌」の発生のための基本的根拠を、イギリス以外のいくつかの諸国における資本主義の一定限度以上の発展、すなわち、それらの国々における自立的な全般的過剰生産恐慌の発生のための基盤の形成、という点にもとめている。このことは決定的に重要である。だが、そのような基本的根拠の指摘は、それだけでは、本来的な世界恐慌の発生のメカニズムも形態的特質をも説明しえたものとはいえない。いくつかの国々の内部におけるそのような基本的根拠の確立も、もしおのおのが孤立・閉鎖したかたちでしか存在しないならば、世界恐慌はありえないであろう。そこで、個々の国々の経済諸過程のあいだの相互作用をひきおこすところの統一的な場、すなわち、世界市場の考察が不可欠である。そして、根拠としての経済的基礎の変化が、統一的な場での相互作用の性格に一定の変化をひきおこすことによつて、経

済諸過程ほどのような運動形態をとるようになるか、これらのことを明らかにしなければならぬ。

メンデルソンは、「一八五七年恐慌の世界的性格」について、つぎの三点に総括している。

(イ) 一八二五年のときのようにイギリスだけでなく、アメリカ、ドイツ、フランス、およびその他多くの国々で、資本主義的蓄積の諸矛盾の生みだす循環性の全般的過剰生産恐慌が不可避免的に発生し反復するような資本主義的發展段階が達成された。

(ロ) 世界市場の發展が高度の段階に達し、経済的におくれた国をもふくめてそれぞれの国を世界的な資本主義的商品取引きにひき入れた。

(ハ) それぞれの国の再生産過程の相互連関が非常につまづいて、それらの国の再生産過程の循環的変動が単一の世界的産業循環に合体した。¹⁰⁾

この三点は、本節のはじめにメンデルソンから引用した「世界経済循環が発生するための諸条件」にのべられた三点とほぼ照応している。ここに、世界恐慌発生のための根拠と形態についての理論的把握のための手がかりが与えられている。だが、それら諸点のあいだの関連性については、メンデルソン自身にあまり不明確な点があるようなので、かれの叙述や指摘を再整理しながら展開してみると、つぎのごとくである。

かれは、まず第一に、一定發展段階にまでたつた資本主義

国の多数化、という世界恐慌発生のための基本的根拠を指摘し、ついで、上記の第二点において、個々の国々の経済諸過程のあいだに相互作用をひきおこすところの統一的な場としての世界市場の問題をとりあげている。かれは、かかる世界恐慌と世界市場との関係について、つぎのようにもべている。

「世界恐慌の発生は、世界市場および世界経済の形成と不可分にむすびついていた。それは相互連関的な過程であつただけでなく、相互制約的な過程でもあつた。恐慌が世界的恐慌となるためには、主要な資本主義国のおおの経済的發展が一定の段階にたつていなければならなかつただけでなく、それらの国々のあいだに十分に發展した商業、信用およびその他の経済的諸連関、それになにもまず、世界価格形成のための基礎となる市場獲得競争が存在しなければならなかつた。そのためには、かなり高度に發展した世界商業、世界的規模の海運、世界的規模の通信手段が必要であつた。〔一九世紀最初の四半期にはまだこれらの条件のすべてが存在していたわけではない。〕だがすでに、一八世紀末にはそれらは熟しはじめていた。五〇年代は、しだいに蓄積されてきた量的変化が新しい質に転化した時期であつた。」¹¹⁾

このように、統一的な世界市場の形成と發展は、資本主義が一定の發展段階にまでたつた個々の国々の循環運動を結びつけ、それらの運動を促進あるいは制約することによって、個々

の国の経済諸過程の運動の総体を、個別的運動のたんなる寄せあつめとしてではなくて、統一的な世界経済の運動として展開せしめるものである。ここに、世界恐慌の発生と展開にとつて、世界市場の形成と発展が、「相互連関的」ならびに「相互制約的な過程」として、不可欠な「必要条件」を構成する根拠があるのである。しかも、同時に、世界市場の形成と発展は、世界恐慌の基本的根拠が確立していない場合、すなわち、資本主義がまだ複数以上の国に形成されていない場合においても、あるいは、いかなる時期であれそのような基盤の確立していない国にたいしても、恐慌の「波及」をひきおこす場としての役割をはたすことによつて、世界市場にひきこまれていくすべての因にたいして、恐慌の時期的統一をもたらすよう作用するのである。

ここで、世界恐慌と世界市場との関係についてのメンデルソンの把握のなかに、ひとつの重要な不十分さが含まれていることに注意しなければならない。それは、世界恐慌の必要条件としての世界市場の形成と発展ということを、世界市場における個々の国々の相互のあいだの「経済的諸連関」、一般の緊密化の強化という形でとらえていることである。そこには、一定の発展段階にまでたつた資本主義国の単数から多数化への変化という基本的根拠の確立が、諸国のあいだの世界市場の相互関係の内容にどのような変化をあたえるかということが十分に明確

でない。そのため、「五〇年代に」、しだいに蓄積されてきた量的変化が新しい質に転化した」ということの意味が、「経済的諸連関」の緊密化の量的増大としてしか理解されず、世界市場における「経済的諸連関」の内容における質的变化があきらかでない。メンデルソンは、さきの引用文のなかで、「恐慌が世界的恐慌となるためには、……なによりもまず、世界価格形成のための基礎となる市場価格競争が存在しなければならなかったのである」との示唆にとむ指摘をおこなっている。ところが、それにもかかわらず、その点を十分に吟味し、理論的規定をあたえ、理論体系のなかに明確に位置づけるということをおこなっていない。（あとでみられるメンデルソンの世界恐慌論における不十分な諸点は、かかる世界市場の連関における質的变化を明確に規定しえていないことにもとずいている。）

ところで、かかる資本主義国の多数化とそれらのあいだの統一的な世界市場の連関とは、世界恐慌発生のための「必要かつ十分なる条件」を構成するが、それらの確立によつて、恐慌あるいは経済諸過程の世界規模での運動は、あたらしい運動形態をもつようになる。それは、さきにもたメンデルソンの引用文の——一般的には「世界経済循環が発生するための諸条件」の、具体的には「一八五七年恐慌の世界的性格」の——第三点にあらわされている。第三点とはなにか。それは、「ことなつた国々における循環局面の交替の全過程の国際的な統一」、す

なわち、「個々の国における循環は単一の世界経済循環の構成部分に転化する」ということである。したがって、この段階においては、経済循環運動は単一の世界経済循環の運動として展開し、循環性恐慌の発生も、本能的には世界恐慌として、同時に成熟・展開するものとなる。メンデルソンは、その過程について、つぎのようにのべている。

「イギリスその他の各資本主義国における再生産過程の循環性は、連続的にくりかえす恐慌の影響をうけてはじめて、しだいにできあがってきた。それが、世界恐慌の発展の内的な合法的連関でもあれば、世界循環の発展の内的な合法的連関でもある。固定資本の拡大と更新との諸過程が決定的なすべての資本主義国で同時に、大規模なものとなるときにはじめて、盛況も真に世界的なものとなることができる。しかし、このような同時性は、これらの国々がいくつかの恐慌に同時に参加した結果としてのみありうるのであって、これらの国々のそれぞれに資本主義がかなり高度に発展していることを前提としている。個々の国々の再生産過程が盛況局面において統一されるためには、それらの国々のあいだに、恐慌局面のばあいよりもいっそう緊密な連関があり、それらの国がいっそう高度の発展段階にあることが必要とされることは、疑いがない。⁽¹³⁾」「こうして、個々の国々の再生産の循環的進行の相互のからみあいは、しだいに増大し、ますます緊密になって、単一の世界循環性ができ

あがった。世界恐慌は、またそれ以上に世界産業循環は、国民的諸恐慌および盛況のたんなる時間的一致ではない。それらは、国際的分業も、世界的な商品流通と信用および国際競争も高い発展段階にたつたということの証明である。この段階はやつと十九世紀なかばに達成された。⁽¹⁴⁾」

すなわち、「いくつかの国々における資本主義の一定段階までの発展」は、世界市場の発展を媒介として、個々の国々の経済諸過程の運動をあらたな形で世界的に結びつける。このような状況のもとで、しかも連続的にくりかえす恐慌の影響をうけて、「固定資本の拡大と更新との諸過程がすべての資本主義国で同時に大規模なものとなり、したがって、「盛況も真に世界的なものとなる。」「このような盛況の同時性は、個々の国々の再生産過程が盛況局面において統一」されたことを意味するものであって、かかる盛況局面の世界的規模での同時的展開のなかで、恐慌要因もまた不可避的に個々の国の内部に同時に成熟せざるをえなくなる。このように、恐慌の世界的同時性と、この時期にはじめて出現した循環性盛況の世界的統一とをテコに、「個々の国々の再生産の循環的進行の相互のからみあいはいっそう緊密なものとなっており、「個々の国における循環は単一の世界経済循環の構成部分に転化」している。このような形で、「一九世紀なかばに達成された」世界経済循環の形成という資本主義のあらたな運動形態に基礎をおいて、メンデ

リソンは、世界恐慌を単一の世界経済循環の一局面として把握し、この点に、世界恐慌が同時に成熟・爆発・展開することの必然性をとらえている。

以上みてきたことからあきらかなように、世界経済恐慌についてのメンデリソンの理論は、ヴァルガやエルスナーなどの波及理論とはまったく異質なものであって、このような見解は、あとでふれるように、わが国の井汲卓一氏の見解と共通するものである。しかも、その理論構成はかなり精密なものであり、論理的一貫性をもつばかりか、詳細な恐慌史分析のうえに築かれているものであって、世界恐慌論のあらたな前進のための基本的方向をさし示したものといえよう。

だが、メンデリソンの理論にも欠陥がないわけではない。その基本的骨格は正しいものであるとしても、その理論化においてまだ多くの不十分さをもっている。それは、とくに、恐慌史の具体的分析にもとずいた理論化をおこなうにあたって、諸要因・諸範疇の理論的規定と位置づけをあたえるさいに、適確な理論化の不十分なまま、具体的事実でもって説明してゆくという方法がとられがちである、という点にあらわれている。そのため、かれの理論の基軸たる、資本主義国の多数化という世界恐慌の基本的根拠の確立が、世界市場の内容と構造とにどのような変化をあたえたか、あるいは、それによって単一の世界経済循環がつくりだされ循環局面の同時的交替がおこなわれる

ようになるためのメカニズムはどのようなものであるのか、といった点について、明確な理論的規定をあたえていない。すなわち、世界経済循環の形成こそが、世界恐慌を、たんなる恐慌の国際的波及と区別される本来的な世界恐慌たらしめるのであるが、その場合、個々の国々の再生産過程が盛況局面に統一されるための世界市場的連関について、「恐慌局面のばあいよりもいっそう緊密な連関」が必要であるとしながらも、「国際的分業も、世界的な商品流通と信用および国際競争も高い発展段階にたつた」という形で、世界市場における「経済的諸連関」一般の「いっそう」の「緊密」化としてしかとらえられず、その内容における質的変化があきらかでない。その結果、世界循環形成のテコである盛況局面の同時性の確立について、「固定資本の拡大と更新との諸過程が決定的なすべての資本主義国で同時に大規模なものとなる」としなからも、「固定資本の拡大なものとなることができる」としなからも、「固定資本の拡大と更新が……同時に大規模なものとなる」のは「これらの国々がいくつかの恐慌に同時に参加した結果としてのみありうるのである」としかとらえられなくなってしまう。たしかに、恐慌局面は、経済循環の運動にとっての「規定的な局面」である。しかし、恐慌の局面が世界的に同時化されたからといって、それだけで盛況局面の同時的展開を説明することはできない。恐慌からの脱出とそれ以後の局面交替、とくに盛況局面

の展開については、その起動因としての「固定資本の拡大と更新との諸過程」の各国における進行が、相互に規制しあい促進しあうところの世界市場的連関のなかで、はじめてその同時性を確立することができるのである。この場合における世界市場的連関は、この時期にはじめて確立された複数以上の「一定の発展段階にまで達した資本主義諸国」の相互のあいだの資本主義的国際競争という、「経済諸連関」の内容における質的変化を基調にしている。メンデルソンにおいては、この点がはっきりしないため、「盛況局面の同時性」と、世界循環の形成のメカニズムが明らかとなりえない。

端的にいうと、メンデルソンの世界恐慌論の欠陥は、その重要な指摘たる「世界経済循環が発生するための諸条件」の三点についての相互連関性と規定性をもった理論的体系化がおこなわれていない、ということにあるものといえるであろう。⁽¹⁵⁾

- (1) И. А. Мемлинсон, Теория и история экономических кризисов и циклов, Том I, 1959, Менделерсон『恐慌の理論と歴史』飯田・平館・山本・平田訳、青木書店、第一分冊、一九七一—一九八頁。(以下本書より引用のばあい、邦訳分冊数については、(I)(II)などによってしめす。)
- (2) (I) 一九九頁。 (3) (I) 二〇五頁。
- (4) (I) 二〇九頁。
- (5) 「外国貿易とそれに基礎をおく国際信用は、一つの国における過剰生産と社会的再生産の全過程の混乱とが、他の

国々の経済においても恐慌現象が発生し、恐慌が勃発するのを助長する導管となっている。」(メンデルソン、同上、一五五頁。)

- (6) (II) 三六六頁。 (7) (II) 二六〇頁。
- (8) (II) 三六六頁。 (9) (I) 二一〇頁。
- (10) (II) 四九〇—四九一頁。
- (11) この文章は、原文では部分否定となっているので、訳文の一部をあらためておいた。(Tar are, sup. 149.)
- (12) (I) 二一〇頁。 (13) (I) 二一一—二一二頁。
- (14) (I) 二二二—二二四頁。
- (15) 戦後循環の分析にあたっては、メンデルソンは、あくまで世界経済循環の視角から把握しようとしている。そのばあい、かれは、世界大戦による各国経済の分断や循環局面の同時性の破壊にもかわらず、「各国の経済構造のうち」に反映している」ところの「各国経済の相互依存性」のなかに「資本主義世界経済の時間上の単一性と空間上の単一性」の保持をみだし、かかる単一性を基礎とした分析の必要を強調する。だが、同時に、「恐慌の法則的作用は、…経済条件が異なるればひとしくないし一定の変形をうけることがあり」とくに、「戦争、経済の職時軌道への引入れ、インフレーションおよびそれらの諸結果によってひきおこされた特殊な条件のもとでは、一種特別な資本主義的経済恐慌」がおこるとして、それを「軍事インフレ恐慌」と名づけ、かかる「軍事インフレ恐慌」と「過剰生産恐慌」と

のからみあいという点に、戦後における世界経済恐慌の特殊性をみようと、つぎのように説明している。

すなわち、「一九四五年下半期にはじまった世界経済恐慌」は、「アメリカにおける部分的過剰生産恐慌」をふくみつつも、「基本的には軍事インフレーションの性格の恐慌」であった。ところが、一九四八―一九四九年の恐慌においては、「世界経済恐慌の発展における環」であるアメリカについては「循環性の全般的過剰生産恐慌」であった。それを「全般的過剰生産世界恐慌」としてみるのは根拠のないことである」にしても、「西ヨーロッパ、日本その他の軍事インフレ恐慌と緊密な相互関連にあったこと」を考慮にいとると、「異種の恐慌過程のこうした一致」は、「一九四八―一九四九年恐慌が戦後世界経済恐慌の一発展段階だったことを意味する」ものであり、「一九四七―四八年恐慌をもつて、一九三七―三八年恐慌を始点とする世界経済循環が終り、「あらたな世界経済循環がはじまった」ことをしめすものである。ところで、それを始点とする戦後循環も、「軍事経済下の周期的繁栄」ののち、「一九五六年に世界の経済的周期に転換がおこった。繁栄から恐慌への移行がはじまった。」この世界恐慌においても、アメリカについては「相当の深さをもつ通常の周期的な全般的過剰生産恐慌」であることは明らかであるが、「しかし、恐慌の世界的性格は、ヨーロッパの主要資本主義国や日本の過剰生産は依然として部分的であって、全体的性格をもっていない以上、

十分はつきりとはあらわれていない。」しかし、それは、この恐慌の世界的性格を否定するものではない。「現代の世界恐慌の進展のすべてが、まったく異常な性格をもつていて、恐慌は突発という形ではなく、ゆっくりと進展する。恐慌へすべりこんでいくかのようにしておこる。これは、個々の国における全般的経済恐慌の前提の成熟の不均等なことと、部分的恐慌とに関連している」のである。(以上、引用句については、第一節註(4)にあげた文献参照。)

このように、メンデルソンは、世界恐慌の視角を中心にすえながら、循環変形的な考え方を展開している。それは、きわめて興味ある分析であるが、しかし、そこでは、世界循環の周期の転換となる恐慌を他の暗恐慌と区別する基準があきらかでない。このことは、世界循環の実体としての世界経済の統一性を、世界循環の形成をひきおこす「特殊な」世界市場の連関性からでなく、世界市場の連関性一般、あるいはその基礎としての各国経済構造の「相互依存性」から、とらえようとすることに由来している。したがって、そのため、世界循環のテコとしての盛況局面の同時性をひきおこす要因と戦後の条件のもとでそれがこころむる影響についての分析が不十分となり、かくて、なぜ「全般的経済恐慌の前提の成熟が不均等」になるのか、また、恐慌の展開がどうして「すべりこんでいく」ような形をとるようになるのか、といった諸点についての説明もあきらかでない。